



# 婦人と子ども

第四卷第九號

## 眞乃勇者

やまとの翁

今年ことの一月頃であつた、日本にと  
露西亞ろしあとの仲なかが、だんく悪わるく  
なつて、今いまにも戦争せんそうが始はじまり相あい  
になつて來たのを見みて、氣きの早はや  
い西洋せいようの新聞通信員しんぶんつうしんいんだの  
陸海りくかい

軍の武官たちは、正月早々、大急ぎで以て、大勢、日本へやゝて  
 來ました。

やゝぱり、其時分、亞米利加のバンクーバーを出帆して日本へ向  
 けてやゝて來た汽船があつた。船の名は、グレイト、バードとい  
 ふので、總噸數は、一万一千噸、此間、上村艦隊のために、撃沈  
 せられた、浦鹽艦隊のリュールック號よりはまだ少し大きい、何しろ、  
 只の商船としては、すばらしい大きな汽船で、又他の汽船から見  
 ると、客室も非常に立派だし待遇もずばつと親切だといふので、  
 大抵の人は、皆此船の出帆をまちかまへておたと見えて、出帆の  
 日になると、各室とも大方満員であつた。

で、此大勢の船客の種類はいろくで、先づ國別にすると、第一

番に亞米利加人が一等多いのであるが、次には英吉利人、次には  
 佛蘭西人、夫から獨逸人、澳大利人、夫から、西班牙人も居れば  
 葡萄牙人も居るし、希臘人も伊太利人も、まづ、歐羅巴各國の人  
 々は男も女も、皆乗り合はせて居るけれども、露西亞人丈は、一  
 人も見えない、夫から、亞細亞人には、土耳其人が四五人と、支  
 那人が七八人、尤も、下等室には、支那の労働者が、二三十人も乗  
 っ居た。夫に、日本人が、十二三人、之も、下等室には、労働者と  
 見えるのが、二百人許りも居た。位のものであったが、之を、職業  
 から分けると、又いろいろである、商賣人もあれば、新聞記者も  
 あり、官吏もあれば、學者もあり、學生もあれば、宣教師もあり、  
 小説家も、畫家も音楽家も、まづいろいろさまぐの人が乗り込

んで居た。

こんな風だから、航海中、食事の後、甲板の上などへよると、いろくの話が、そこから、こゝからも湧いて来て、中々面白いのであるが、夫でも、時節柄、一番、話に花のさくのは、今にも始まらうといふ日露戦争談であつた。

ある日の晝すぎ、波は少し高いが、天気は殊更温かくって心持がよいので、皆々、いつもの通り、甲板に出て来て、こゝに五六人向うに七八人といふ風に、より集つては、何か話し合つたり笑つたりして居た。すると、ある一かたまりの中で、又おきまりの日露戦争談が始まつた、然し今日の戦争談は、いつもの様に、たゞ大勢で、がやく出鱈目に饒舌つてるのと違って、餘程、眞面目

に熱心であつて、そして話して居るといふよりも寧ろ論じて居る様で、相手もたつた二人。然も其一人は、いかめしい獨逸の陸軍士官で、片々は瀟洒した英吉利の新聞記者なのである。

戦争の話といふと、いつも、どこからとなく大勢集つてくるのであるが、殊更、今日のは、出鱈目の話と違つて戦争専門の獨逸士官と、博學の譽ある英吉利の新聞記者との、眞面目な議論と來たから、さあ、集つたとはく上等中等の船客は、二人の周圍に、まっくろになつて人山をこしらへた、此中の日本人、之は何れも、獨逸や英吉利に留學して居った人たちだが、始めつから、其場に居つて、二人の議論を熱心に聞いた居た。

さて、先程から、大分長く、二人で議論して居たものと見えて、



高橋

今は、丁度、眞最中らしく、かの獨逸士官は、しきりに肩をいからし、恐ろしく目を光らかせながら、口から泡を飛ばして、新聞記者に食ってかゝって居る。

士じ あ、君、ブラオン君(新聞記者の名)君は、どうしても僕の議論に反対するね、どうしても、此戦争では、露國が敗北するといふのかね、君、オイ、ブランオン君」

ブラオン「左様、我輩の觀察によると、どうも、露西亞に勝てる理由がないからな、夫に、日本の方には戦勝の理由が澤山ある、君は軍人で居て、夫が分らんかね、ケルレル大尉(士官)どうです」

ケルレル「なんだ、失敬な、僕に分らん事があるものか、露國に戦勝の理由がない？、君は、新聞記者で居て、何を書いてるのだ、ないと

いふなら、話して聞かせようか」

「ブラオン」ぢや 承はりましたよかな」

「ブルル」先づ第一に、露國と日本との國の大きさを考へて見給へ、露國は何しろ世界陸地の七分の一の領地があるぜ」

「ブラオン」そりや露西亞が廣いのは今更言ふに及ばないじゃないか、歐

羅巴露西亞丈けでも、日本の大方十二倍の廣さ(五萬積方里)があるし、

夫にシベリヤ丈けが、日本の三十倍(萬餘積方里)また、露西亞領中央

亞細亞が日本の八倍もあるのだから、皆合すといふと、丁度、日

本の廣さの五十倍にもなる、が、然し、國の大きいといふことは

必らず戦勝の理由にならないことは、今から、十年前に、日本が

自分よりか三十倍も大きい支那を敗つたのでも分るからね」



といふと、ケルレル大尉は、ひどくヤツキとなつて、ケルレルそりやそうさ、國が大きいからといつて、夫丈けでは必らずしも勝てるとは、僕も論じない、然し、日本と露國とは國に大小の違がある通り、夫れ丈け軍備に非常な相違がある、古から兵學者の言ふ通り、寡は次て衆に敵せずだから、此點に於て、日本はとて露國に叶はぬと思ふな、先づ、露國の陸軍を見給へ、すは戦争といふ日には、士官から下士卒合はせて百三十四萬人、其外に豫備士官以下が八十五萬人あるぜ、夫に、今度、戦争の舞台にならうといふ極東派遣軍が二十萬人、そこで、之に對する日本の陸軍はどうだ、平時は僅か十六萬、戦争の時といつても、漸、六十萬しか備へられんじやないか、之で以て陸軍の方の勝敗は言は

ずとも知れやう、まして、露國のユサク騎兵と來たら、勇猛無  
 比、殆んど世界に敵なした、日本の騎兵などが、ユサクに向ふ  
 もんなら、見給へ、夫こそ、丸で、赤兒の様なものだから、夫か  
 ら、海軍じゃが、之はまあ、主に太平洋艦隊で比較て見よう、第  
 一旅順口には、一万噸以上の戦闘艦が七隻、巡洋艦が七隻、夫に  
 水雷母艦だの驅逐艦だの水雷艇だの約五十三隻はある、夫から浦  
 港には、巡洋艦が四隻、其中一万噸以上のが三隻、其他に驅逐艦  
 だの水雷艇が大分ある、所が日本の方は、どうだ、一万噸以上の  
 戦闘艦は成程六隻はある、巡洋艦も、益に立たうといふのが、一  
 千噸以上なので二十六隻、其他には海防艦だの砲艦だの報知艦だの  
 廿一隻もあるが、實戦の間に合ふかどうかは怪しいて、併し水雷

艇なども合はせて、先づかりに、露國の太平洋艦隊と對等の力が  
あるとしても、露國には、此他バルチック艦隊がある、戦艦が  
十八隻、巡洋艦が三十五隻といふ大艦隊だ、夫から黒海艦隊に裏  
海艦隊などがある、だから、一步譲つて、太平洋艦隊が全滅され  
たとしても、直ちに第二太平洋艦隊を派遣することか出来る、ま  
して、太平洋艦隊が全滅する様では、日本艦隊も、とても、満足  
には残らぬから、此新手に出遭つたら、夫こそ、全く滅亡するだ  
らうよ、だから、戦争すりや、吃度、露國が勝つ、日本も賢いか  
ら、負けるを知つたら戦争はしないに違ない、だから、今にも戦  
争が始まり相に騒いで居るが、そりや、ほんのおどかしで、結局  
戦争は日本の方から避けることになるのは分り切つた事だ、どう

だ、ブラオン君、之でも、君はまた反對するかね」

さすが、専門家だけあつて、敵味方の軍備を細かく比較して、沿々として息もつがずに論じたので、側に聞いて居た外國人など、中でも佛蘭人などは、一度に拍手喝采して、大尉の議論に賛成の意を表した。

今迄黙つて、たゞ、にこくと笑ひながら、時々、巻煙草の烟をフーッと上の方に吹き出して、聞いて居たブラオン君は、大尉の言葉の終ふのを見て、靜かに口を開いた

ブラオン「いや、さすがに君は軍人丈けに、中々細しい議論の立て方の様だ、併し、我輩には、全然感心することが出来ないね」  
「ケルレル」なんだと」

プラオン「勿論さ、なる程、露國には二百四五十萬の陸軍が出せようし  
 日本では、やつと、六十萬しか出すことが出来ない、けれども、  
 君は、露國の二百四十萬の兵隊が、悉、極東に来て日本兵と戦ふ  
 ことが出来ると思ふかね(此時、側に居た日本人の中からヒヤ／＼といふ者があつ  
 した音がいざ戦争となる、)此大部分は君、夫れ／＼彼の廣大な國境  
 を守らんければならぬよ、でない、ポーランドが獨立しかゝる  
 よ、フキンランドに叛徒が起らう、バルカン問題がますます六ヶ  
 敷なる、よし、かりに此邊を守つた残りの大兵を送るにした所が  
 本國から、何千里離れてとても／＼十分な軍需品の輸送ができる  
 ものか、だから結局東洋で戦争する兵は、まづ多くつて三十萬位  
 が關の山さ、すると、日本の六十萬に對して半分しかないじやな

いか、(又亞米利加人や英國の日本人音がする)又海軍の方だ、コリや、どうしても  
 太平洋艦隊とだけでくれば合んけりゃいかぬ、君は、バルチック  
 艦隊など盛んに吹きたてるが、彼の大艦隊がはるく、東洋までや  
 ツて來られるか來られんか、素人にでも分るこっちゃないか、ま  
 して、黒海艦隊は、あの海峡が出られるもんじゃなし、更に裏海  
 艦隊などがなんじや、丸で足をもがれた蟹じゃないか、だからさ  
 まづ海軍は太平洋艦隊とだけでくれば合ふだね、そうすると君  
 軍艦の數の上からいっても、噸數からいっても、日本の方は遙に  
 有力だよ、君はたゞ同じ様に、一万噸以上の戦闘艦といふが、日  
 本の方の、一万五千噸以上の朝日以下三笠、初瀬、敷島の様な最  
 新式の軍艦に匹敵するのが、露西亞には一艘もなからう、夫に

と、いって、手に持って居たシガラの灰を一寸落して、一服すって見て、

「夫に、君は、たゞ無闇と、數の上から許り論じたから、我輩も數の上から辯駁したのだが、いくら數許り多くったって、勝てるとはいはれない、なる程君のいふ通り、コサツク兵も強からう、然し夫は、彼の蒙古兵だの支那の馬賊だの、朝鮮の兵なぞと戦つて強いのだらう、日本の騎兵と比べて見て、どっちが強いか弱いかわかるものか、夫からも一つ茲に肝心なことがある、日本はツイ先頃まで、日清戦争だの、北清事件だの、たびく實戦をやつたから、陸軍でも、海軍でも、すっかり、戦争の稽古が積んで居るといふものだ、露西亞はどうだ、なる程、馬賊だの、一揆など

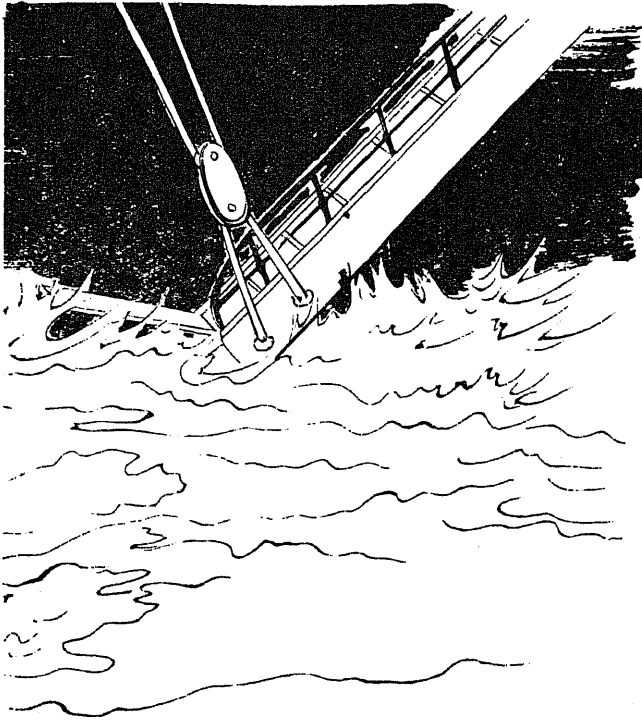
へは喧嘩したのが、有力な軍隊と戦争したのは、クリミヤ戦争この  
 かなないじやないか、従って又、日本の陸海軍は、一切最新式の  
 戦術を應用して居る、この點に於て、露西亞の方は百歩も千歩も  
 譲らんければならぬと思うね、夫から、念のため、も一つ論じた  
 い、近世の兵術家のいふ様に戦争の勝敗は、主に軍隊の精神に關  
 係する、まあ、日本人の愛國心の盛なのを見給へ、とても露西亞  
 人などが、誰のために戦争するのだからさへ知らないのとは、丸で  
 雲泥の違ひや、上將校は勿論、下兵卒に至るまで、すっかり、  
 天皇陛下の爲にすてる命だといつて居る、夫に彼の君の國なども  
 關係があるが、十年前のそら三國干涉だ、日本ではひどくあれを  
 遺恨に思つて、いつか、敵を取らんければといふので、十年の間



一生懸命に、夫ばかり目的にして、軍隊を練って来たもの、  
今に露兵に向ふ時は、丸で一騎當千の兵となるに違ない。  
君はたゞ數や大きさの上から議論して、露西亞が勝つに決ってる  
様にいふが、我輩は以上の議論によつて、きつと日本が勝つとい  
ふのだ、どうた、ケルレル大尉、我輩の議論の方が十分根據があ  
るだらうじゃないか」  
博學の譽ある新聞記者だけあつて、其見る所、言ふ所は、一層大  
尉よりは勝つて居るので、ぐるりの外國人等は一度に拍手喝采し  
た。すると、彼のケルレル大尉は、ブルくくと震へ出して、顔  
を眞赤にして怒り出した、そして、右の手に確とサーベルの柄を  
握つて、

ケルレル「ウン、なる程、君の議論も一理あるたらう、併し僕は服することが出来ない、だから、此場合、僕は君と決闘を望むのだ、さあ、プラオン君、用意し給へ」

そら、例の獨逸流が始まつた、決闘を申しこまれて逃げるのも卑怯だから、プラオン君は、どうするかと、皆が片唾を飲んで見てみると



ブラオン「決闘！ まあ、

御免蒙りませうね」

ケルレル「卑怯じゃないか」

ブラオン「卑怯でもなんで

もいく、御免蒙らうよ」

ケルレル大尉は、尙

進んで、決闘を迫ら

うとする中に、ブラ

オン君は、どこへ行

ったか、はや影も見えない、側に居た獨逸人や佛蘭西人は、口ほ

どにもない卑怯な英吉利人だと笑った。



其日の夕方であつた、空はますます晴れて居たが、波はますます  
 荒れて居た、所が皆と一所に、甲板上に子供を抱きながら散歩し  
 て居た獨逸の婦人が、どうした機會だつたか、其子供を波の中に  
 落した。さあ大變だ、そら救の船だと皆が騒ぐ間にすぐ上衣をぬ  
 いで飛び込んだ外國人があつた、やがて船がとまる、端艇が下り  
 た、そして、片手にしつかと子供を抱き上げて遊ぎついた外國人  
 を救ひ上げて、本船へ上げて來た、此英雄は一體誰だらうといふ  
 ので、皆で集つて行つて見ると、前に決闘を逃げたブラオン君で  
 あつた。

側に居る見た居る日本人や亞米利加人や其他の外國人は皆一様に、前  
 に卑怯といはれた、英吉利のブラオン君こそ、眞の勇者だといつ



て感心した。

猿と左官

左官が、セツセと、白壁をぬ

ておると、

親子の猿が、そばで、見てゐて

さてく、人間といふものは、

妙なことをするなと、思っている、